

土岐鷹から 麒麟へ

明智光秀ゆかりの地 山県市「土岐鷹から麒麟へ」

発行／山県市教育委員会 〒501-2192 岐阜県山県市高木1000番地1
Tel.0581-22-6845 Fax.0581-22-6851 E-mail:info@city.gifu-yamagata.lg.jp <http://www.city.yamagata.gifu.jp/>



美濃の乱世はじまりの地 もう一つの光秀ものがたり

濃尾平野の北の端に位置する山県市。

この地に、かつて美濃国（現在の岐阜県美濃地方）の歴史を変える舞台となった山城があります。

大桑城と呼ばれたその城と城下町は、鷹を愛した美濃国守護・土岐氏の政治拠点として栄えました。しかし、斎藤道三との戦いの場となり、守護土岐氏は敗れ去ります。大桑を舞台とした道三の下剋上によって、美濃の乱世は幕を開けたのです。

そして、土岐氏の流れをくむ武将で、斎藤氏を排して美濃を平定した織田信長に仕えたのが、明智光秀です。

光秀をめぐる伝説は全国各地に残っており、山県市には、「光秀が生まれた地」と伝わる地区があります。光秀は山崎の合戦で亡くなったとされますが、その地区では「合戦後も生きていた」と言い伝えられています。それは、戦国の時代を駆け抜けた智将、光秀の「もう一つのものがたり」ともいえるでしょう。

美濃の乱世はじまりの地
そして、もう一つの光秀ものがたりへ。

今、ときが再び、舞い戻る

山県市
YAMAGATA
City

目次

大桑城編	
鷹を愛した	4・5
美濃国守護・土岐氏	
大桑城のすがた	6・7
土岐氏と大桑の繁栄	8・9
土岐氏最後の戦いの地、 夢の跡	10・11
明智光秀編	
もう一つの	
光秀ものがたり	12・13

※本冊子は、山県市歴史ストーリーガイド「今、ときが動き出す」
（山県市教育委員会監修）から土岐氏、大桑城、明智光秀関連の
内容を中心に抜粋・再編集した別冊版です。

鷹を愛した 美濃国守護・土岐氏

室町時代から戦国時代にかけて、200余年にわたり美濃を中心に権力を誇った土岐氏。山県市の大桑地区は、その土岐氏とゆかりのある豪族らによって徐々に整備されたと考えられています。そして、美濃国の守護(国を治める役職)を務めてきた土岐氏が、大桑の地を最後の拠点としたことで、重要な歴史の舞台へと変貌していきます。



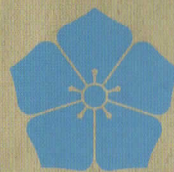
「絹本着色 鷹の画」
(南泉寺蔵、山県市指定重要文化財)

土岐氏とは

土岐氏は清和源氏の流れをくむ美濃を地盤とした武士の一族です。家紋を旗印とした土岐族の結束は「桔梗」揆として有名で、將軍足利尊氏や義満からも絶対の信頼を得ていました。そのため初期の頃は美濃、尾張、伊勢の三方国の守護に任命され、その後は戦国時代にかけて美濃一国の守護を務めていました。

土岐氏の家紋

守護土岐氏は、桔梗を家紋としていました。白地に水色の桔梗の花を染め上げたもので、「水色桔梗紋」といわれています。



鷹を愛した土岐氏

土岐氏は代々、和歌や連歌、漢詩、猿樂・舞、そして水墨画に至るまで、文芸を幅広くたしなんでいたことが良く知られています。

また、土岐氏の歴代守護は、鷹をこよなく愛しました。当時の武將にとって、鷹

の勇猛さや凛々しさは、武勇へのあこがれの象徴でした。土岐氏は鷹狩りなどの目的で鷹を所有していたとみ

られ、さらに水墨画で鷹を描くことを得意とした者もいました。特に、大桑城に住んだ土岐氏最後の守護・土岐頼芸は、優れた鷹

画の描き手だったと伝えられており、

その作品は「土岐の鷹」の名で後世まで珍重されています。大桑地区にある土岐氏の菩提寺・南泉寺^㉑には、頼芸が描いたと伝わる「絹本着色 鷹の画」(山県市指定重要文化財)が所蔵されています。



大桑城とその周辺について描かれた近世の絵図

南泉寺

土岐氏は禅宗の中でも主に臨済宗を庇護し、山県市内には多くの名刹が現存しています。その一つである南泉寺は、永正14年(1517)に当時の守護土岐政



房(頼武と頼芸の父とされる)が仁岫宗^{にんしゅう}を招いて、土岐氏の菩提寺として開山しました。頼武の長男である頼純が天文16年(1547)に亡くなった際は、この寺に葬られたといわれ、寺内には頼純の墓があります。天文20年(1551)には土岐一族の出身で「安禅は必ずしも山水をもちいず、心頭を滅却すれば、火も自ずから涼し」の辞世で知られる快川紹喜^{かいがしゅうき}が住職となり栄えました。頼芸の作と伝わる鷹画のほか、頼純の肖像画、仁岫和尚らの語録などが所蔵されています。

※文章中で記号(㉑)が付いている場所は14・15ページの地図に表示しています。

大桑城のすがた

堅固な山城

大桑城跡③は、大桑の地を眼下に見下ろす古城山（標高407.5m）の山頂帯に残っています。

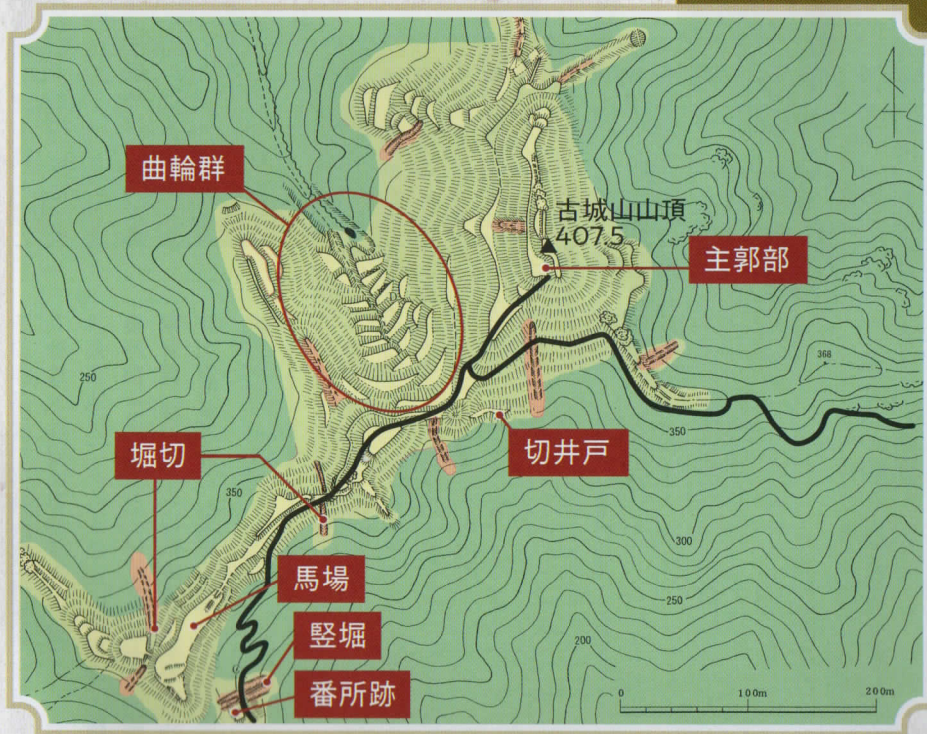
城の中心地である主郭部（天守台）からは、現在の岐阜市をはじめ濃尾平野を一望することができます。南東側の斜面には井戸があり、切井戸（霧井戸）と称されています。

尾根と尾根の北側には、斜面を削って平らに造成された曲輪が大小90余り分布しています。曲輪には城内における位置や用途に応じて、屋敷、監視所、馬場といった、さまざまな建物などが築かれたと考えられています。

また、堀切や堅堀がいくつも設けられ、

敵が尾根や斜面づたいに攻めてくるのを阻み、城内に容易に侵入できないようになっています。

大規模な堀と土塁で囲まれたふもとの城下町と併せて、大桑城は堅固な守りを誇る山城だったのです。



大桑城跡概要図 中井 均作図



主郭部(天守台)



切井戸(霧井戸)

切井戸と金鶏伝説

古城山腹の切井戸は、現在も枯れることなく水をたたえています。土岐頼芸が斎藤道三との戦いに敗れ逃げる際、家宝の「金色の鶏」をこの井戸に隠したといい、元日の朝にこの井戸から鶏の鳴く声を聞いた者は、長生きできると言い伝えられています。また、この言い伝えから古城山は「金鶏山」とも呼ばれています。

美濃と越前のつながり

当時の美濃国は、隣接する越前国（現在の福井県）との交流が盛んに行われていました。大桑城跡には、守護土岐氏と密接な関係にあった越前朝倉氏の拠点・二乗谷（福井市の二乗谷朝倉氏遺跡）と類似するような特徴が見られます。

例えば、番所跡（岩門）と呼ばれる遺構がその一つです。門や入城者を監視する施設があったと考えられる場所で、2本の堅堀と、地面を四角く削り出して周囲より高くした段があり、段の側面に「つ」とした石を積み上げた石垣の跡が見られます。当時栄華を誇っていた二乗谷は、巨

石を使った石垣や庭園の荒々しい石組みが大きな特徴で、大桑城が越前の影響を受けたことがうかがえます。

守護土岐氏と朝倉氏のつながりは、土岐氏の支流（分家）にも大きく影響したと考えられます。土岐支流の武将である明智光秀は、織田信長に仕える以前、朝倉義景を頼って越前で過ごした時期があると伝わっていますが、これも両家の深い関係が背景にあったからこそと思われます。



番所跡(岩門)

土岐氏と大桑の繁栄

大桑城下町跡

守護土岐氏が大桑の地に政治の拠点
を置いていたところ、古城山のみもとには
城下町が整備され、城の周辺は町人にて
ぎわったと伝えられています。

当時の大桑城下には、「**四国堀**」^{しこくぼり}
「越前堀」「外堀」といった大規模な堀が
築かれていました。大きな堀や土塁に
よって城下町の内と外のエリアを分ける
「総構え」と呼ばれる構造で、越前朝倉
氏の「乗谷城下にならったものだ」と考
えられています。

大桑の繁栄

守護土岐氏によって大桑には繁栄が

もたらされました。

しかし守護の土岐頼芸は、
勢力を増していた斎藤道三との
戦いに敗れて大桑城を追われ、土岐氏の美濃国支配は終
焉を迎えます。大桑城は守護
土岐氏の最後の拠点となったの
です。

大桑地区には、南泉寺（5
ページ参照）をはじめとする土
岐氏が代々帰依した禪宗の寺
院や、土岐氏の氏神を祀った十
五神社^⑩、頼芸の家臣・早
矢仕新助をめぐる伝説もある
取矢神社^⑤などがあり、土岐
一族が大桑の地で光り輝いた
時代を今に伝えています。



十五神社の狛犬
(山県市指定重要文化財)

「奉土岐氏神」の陰刻



狛犬の基底部

四国堀跡

大桑城下の谷筋をふさぎ止めるように造
られた空堀と土塁の跡です。堀の深さ5m、
幅約8mで、土塁の長さは約100mにわ
たって残っており、山県市指定史跡となっ
ています。

「四国堀」と呼ばれるのは、尾張、伊勢、
越前、近江の四つの国の加勢を受けて築
いたと伝えられることに由来しています。
越前朝倉氏の「乗谷城下」の「上・下城戸」
と同じく、城下を仕切る機能を持つこと
から、その影響がうかがえます。



十五神社

平安時代に創建された神社で、土岐氏が氏神
として崇敬しました。天文9年（1540）に土
岐氏が奉納した狛犬^⑩が現存しています。
狛犬の基底部には「天文九庚子年」、「奉土岐
氏神」とそれぞれ刻まれています。また、越前
産の笏谷石製の狛犬であることが特徴です。
当時の朝倉氏は笏谷石を越前国外にほとん
ど持ち出さなかったことが分かっており、土
岐氏と朝倉氏の深い関係が想像されます。



取矢神社

地元では、神社の名称である「取矢」の
「矢」は水を表し、水を「取」り込む意に由
来すると伝わっています。また、弓の名手であ
る早矢仕新助が、森を散策中に美しい鳥
を見かけ、捕まえようと矢を放ったところ、
鳥はくちばしで矢を受け取り、そのまま飛
び去ったことから、新助はその鳥は神の使
いに違いないと驚き、近くのお宮を新しく
建て直して取矢神社と名付けたという伝
承もあります。神社の近くには小規模な滝
があります。



土岐氏最後の戦いの地、 夢の跡

新たな勢力の台頭

守護土岐氏は応仁・文明の乱(1467~1477)で、西軍方として京都で戦いました。美濃国内は守護代の斎藤妙椿らがよく治め、京都から足利將軍や公家が避難してくるほど安定していました。

しかし応仁の乱後、美濃では守護家や守護代の後継者争いが相次ぎます。守護土岐政房が死去し、子の頼武が守護になった後からは斎藤道三父子が実権を握り始め、主な武将はその勢力下に入っていました。

天文4年(1535)に守護所が大桑へ移り、守護職が頼武から長男の頼純ではなく頼武の弟・頼芸に譲られた頃には、稲葉山城(後の岐阜城)を居城とする道三が、守護土岐氏と対峙するほどになってい

ました。道三の父はもともと京都の寺僧で、還俗して土岐氏の重臣に仕えた新参勢力だったとされています。

土岐氏、道三に敗れる

土岐氏と斎藤道三の激突は天文11年(1542)に始まります。大桑に進攻した道三の軍勢は大規模なもので、激しい戦いが繰り広げられ多くの戦死者を出しました。

戦いの後、戦死者の骨が埋められた場所である南泉寺(5ページ参照)の仁岫和尚が焼香を行ったとされており、後年になって建てられた六万墓^⑤や、江戸時代に村人たちが建立した千人塚の石碑が、その戦いの壮絶さを今に伝えています。

年表 ~大桑城と守護土岐氏の関わり~

西暦	(元号)	事項
1467年	(応仁元年)	応仁の乱が始まる
1519年	(永正16年)	美濃国守護土岐政房が死去。子の頼武が守護になる
1525年	(大永5年)	この頃から、斎藤道三の父が台頭する
1532年	(天文元年)	頼武が枝広(現在の岐阜市長良)に守護所を置く
1535年	(天文4年)	長良川大洪水で枝広の守護所が水災。大桑城を整備し、守護所を移す
1536年	(天文5年)	頼武の弟・頼芸が守護になる
1542年	(天文11年)	斎藤道三が大桑へ進攻する(「大桑大乱」)
1547年	(天文16年)	頼武の長男・頼純が死去する
1549年	(天文18年)	道三の娘が織田信長に嫁ぐ
1552年	(天文21年)	道三が頼芸を大桑から追放し、守護土岐氏は没落する。道三が稲葉山城下町を整備する
1582年	(天正10年)	本能寺の変

道三は、織田信長に自分の娘(濃姫)を嫁がせるなどして、勢力を増していきました。そして天文21年(1552)、ついに頼芸を美濃から追放し、鷹を愛した守護土岐氏の隆盛は終わりを迎えたのです。落ち延びた頼芸は、近江(現在の滋賀県)などを経て、甲斐(現在の山梨県)の武田氏に身を寄せ、美濃に戻れたのは晩年のことであつたといわれています。

繁栄の“遺産”は岐阜へ

下剋上を果たした斎藤道三は、ほんのりとして大桑城を廃城し、大桑城下の町人を

六万墓

六万墓の石碑は、大桑地区の四国堀跡の近くに建っています。「六万(六萬)」という数は定かではありませんが、それほど多くの人々を巻き込む合戦がこの地で行われたことを物語っています。



稲葉山城下の井口^{いのくち}へ移したと伝えられています。現在でも岐阜市内には「上大久和町」「中大桑町」「下大桑町」の町名が残されています。

また、「長良にある崇福寺は、大桑の城下から移された」と言い伝えられています。

美濃国守護を代々務めた土岐氏の最後の拠点として、道三との合戦が繰り広げられた大桑城。土岐氏は敗れ去りますが、大桑の地に築いた繁栄という遺産は、後の岐阜へと引き継がれてゆくの



江戸時代の岐阜の地図「濃州厚見郡岐阜図」(蓬左文庫蔵)

もう一つの 光秀ものがたり



白山神社に伝わる明智光秀の肖像画

美濃国守護として活躍した土岐氏は、数多くの支流（分家）を輩出しました。土岐支流を代表する戦国武将が明智光秀です。光秀は、本能寺の変で主君を討った謀反人とされますが、その実像は智将であり、関ヶ原の合戦の時まで生きていたとも伝わるなど、多くの謎に包まれています。山県市内には、光秀の出生や晩年に関する伝承が数多く残っています。

「本能寺の変」後も 光秀は生きていた？

光秀は信長と最後に袂を分かち、天正10年（1582）6月、本能寺の変を起こします。信長と信長の長男・信忠は自害し、光秀は天下人となりますが、約10日後には羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）の軍と摂津国（現在の大阪府）と山城国（現在の京都府）の境に位置する山崎で激突します。

光秀はこの山崎の合戦で命を落としたというのが通説ですが、中洞地区には「合戦で死んだのは影武者で、光秀本人は生きていた」という言い伝えがあります。光秀は郷里の中洞に落ち延びた後、身代わ

生誕の地と伝わる中洞地区

山県市の中洞地区は、明智光秀が生まれた地だと言えられています。

地区の伝承によると、光秀は土岐元頼（基頼と、中洞の豪族である中洞源左衛門の娘との間に、長男として生まれたといえます。7歳の時に父が亡くなったことから、美濃国可児郡（現在の岐阜県可児市）の明智城主・明智光綱のもとで軍学兵法

を学び、やがて養子となったと伝えられています。

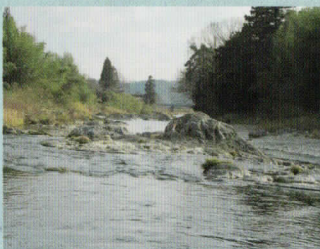
明智城は弘治2年（1556）、斎藤道三の息子・義龍に攻められ落城します。美濃を脱出した光秀は、越前の朝倉氏や足利將軍家への奉公を経て、天下統一を目指す織田信長に見いだされ、信長の家臣として坂本城（滋賀県大津市）、亀山城（京都府亀岡市）の城主となるなど活躍していきます。

産湯の井戸と行徳岩

光秀の生誕地とされる場所には白山神社があり、境内には光秀の母が産湯の水を汲んだという井戸が残されています。また、神社近くの武儀川には、光秀を身ごもった際に母が「たとえ三日でも天下を取る男子を」と祈ったという行徳岩があります。



産湯の井戸跡



行徳岩

明智孫十郎直経の墓

明智孫十郎直経は、恩田氏の出身で、明智光秀の義弟と伝わる武将です。本能寺の変で織田信忠を攻め、討ち死にしたといわれています。

孫十郎直経の墓は山県市富永地区の神明神社近くにあり、父母と本人、妻の戒名が刻まれています。

亡くなったと伝えられています。

中洞地区の白山神社に隣接する林の中に、桔梗塚と呼ばれる光秀の墓があります。塚の名称は明智家の家紋が桔梗であることに由来しており、地域の住民らによって毎年2回、供養祭が行われるなど大切に守られています。

光秀は自らの領地で善政を行い、家臣や領民に慕われたと語り継がれており、中洞地区に限らず全国各地で祭事や供養祭などが続けられています。光秀は、土岐・明智家の再興や領民の幸せをかなえたいという思いを胸に秘めていたのかもしれない。



桔梗塚

りとなった影武者・荒木行信の忠誠に深く感銘して「荒」と「深」を取って自ら荒深小五郎と名乗り、中洞の地で暮らしました。その後慶長5年（1600）、徳川家康の要請で関ヶ原の合戦に向かう途中、増水した藪川（根尾川）で馬共に押し流されて

